

転送した後看護婦諸君を帰宅させ、手伝つて呉れた学生諸君とは、同日夜、村中逃避して誰一人残っていない四尺家で訣れの杯を酌んだ。但し木戸君と学生二人（上野、片山両君）は二十二日角尾教授が逝去され、二十三日告別式がすむまで私の所にいて、二十四日にそれ／＼郷里に引上げたので、それまでは何とか気がまぎれてよかつたが、其後は急に淋しくなり、原爆で死んだ二人の男の子のことが思い出されて仕方がなかつた。

木戸君や私が原子病にかかつたのは九月初めからで、二人とも幸に生命を全うすることが出来たが、村山婦長が丸坊主となり全身が衰弱して殆んど死にかかつていと云う報告を聞いたのも丁度其頃で、一時は駄目ではないかと危ぶまれたが、今日のように元気を回復したのは全く奇蹟と云つて差支ないであろう。

終戦後名残を惜んで訣れを告げた教室の人たちとは、其後全部再会することが出来た。現在教室に残っている人は一人もないが、看護婦諸君の中には芽出度く結婚された方も沢山あり、一、二健康を害された方も調外科に入院して、今では完全に癒られたようである。原爆後遺症の云々される今日、どうか被爆された諸君が末永く元気で幸福に過されるよう祈つて止まない。

産婦人科学教室

当時の教室員としては、内藤勝利教授の下に本多有隣講師、林忠実、草場正蔵、菊池秀夫助手、伊藤茂副手、田中益雄、沖洲吉博、王文其氏（昭和二十年医学部卒業）等が研究並びに診療に當つていた。

雇として片山幸子、田川芳枝、明田沙代子、岩永敏子の諸氏、技術雇として小笹トミエ氏、看護婦として田中米子看護長以下四十四名が勤務していた。尙八月一日の空襲により手術室、部長室、図書室に被害をうけたので入院患者のうち退院可能な者は退院させていた。

被爆時の状況

内藤教授は草場助手及び林先生と共に病棟一階廊下で焼残りの図書文献の整理中に、本多講師、王先生は新患診察室に於て、菊池助手は旧患外来診察室で、沖洲、田中両先生は二階の入院患者治療中に被爆す。

行方不明であつた内藤教授の遺体は数日後病棟一階の熱気室で発見された。

又菊池助手は医局で、青木先生は一階廊下で、田中婦長は階上エレベータ横で、園田看護婦は二階看護婦室で夫々遺体として発見された。

尙草場助手、田中、沖洲先生は重傷を受けた。

故内藤勝利教授略歴

正六位、医学準士、産婦人科学教授

明治三十七年三月十七日兵庫県に生る

昭和二年三月東京帝国大学医学部卒業

昭和二年四月同大学副手となり産婦人科学を専攻す

昭和六年五月東京帝国大学助手に任ぜらる

昭和十四年八月東京帝国大学助教授に任ぜらる

昭和十六年四月長崎医科大学教授に任ぜらる

昭和十八年八月陞敍高等官五等

昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い即死取に殉ず

主なる研究題目

子宮頸癌の統計的研究並びに癌移植の実験的研究。

死亡者の官職並びに氏名

官 職	氏 名
教 授	内 藤 勝 利
助 手	菊 池 秀 夫
医 専 仮 卒	青 木 伸 夫
雇	片 山 幸 子
"	田 川 芳 枝
"	明 田 沙 代 子
"	岩 永 敏 子
看 護 長	田 中 米 子

一 年	二 年	三 年	四 年	産 婆 主 任
白 石	武 藤	光 永	田 中	園 田
チ	サ	良	松	チ
ヅ	ト	子	シ	カ
コ	エ	枝	メ	エ
			タ	
			ツ	
			ヨ	
			代	
			子	
			逸	
			子	
			君	
			子	
			渡	
			本	
			道	
			子	
			本	
			加	
			奈	
			子	
			久	
			枝	
			崎	
			下	
			ス	
			エ	
			子	
			岩	
			下	
			園	

産婦人科学教室原爆記

本 多 有 隣

昭和十八年来頃より医局員の數も次第に減り、終戦の年、即ち昭和二十年一月には内藤教授以下私（本多有隣）、林忠実、草場正蔵、菊地秀夫（以上昭和十六年卒）、伊藤茂（昭和十七年卒）の僅か五名となり、医局員の名札の大部分が応召中の欄に掲げられる様になつて終つた。

新卒業生を期待する訳にもゆかず何んとか之だけで切抜けようと覚悟して居た処、四月に新卒業生の田中益雄、沖洲吉博、王文其の二君、それに医専を出た青木伸夫君、合計四名が新入局されたので大いに力を得た。

其頃より急に敵機の空襲も日を追うて烈しくなり、毎日の様に大都市の被害状況が伝つて来る。然し、幸い長崎は時にB29の敵機編隊が南方より飛来し稲佐上空をかすめて行くのみであつたが、八月一日突然市内上空に現れた爆撃機が病院の建物目がけて低空飛行し、二五〇キロ爆弾を盛んに落し始めた。

屋上には前以つて赤十字のマークを大きくペンキで書いてある筈だと思つたが、赤十字も何もあつたものではない、一時間近く上空を旋回し内科、外科、耳鼻科、産婦人科と処嫌はず各所に爆弾を落され惨々たる被害、産婦人科教室も手術室、部長室、図書室等のある別館に命中し屋上より地下迄抜けてしまい、其上図書室より発火、医局員、看護婦、学

生等総出動で消火に努める処へ各科の応援を得て漸く鎮火し得た。

この間よく皮膚科屋上に唯一人立つて敵機の模様を大声で報告して呉れた学生の上野君の声が今尙私の耳に残つて居る。

然し、此の空襲により貴重な文献、図書の大半を焼失し、内藤教授の落胆は傍で見て居られぬ程で、僅かに焼残つた文献を一枚一枚丁寧に拾ひ合せ乍ら整理する日が其後一週間目に来る原子爆弾など夢想だにもせず毎日続いた。

此の爆撃に依つて急遽入院患者の整理に取りかゝる様命令があり、手術患者も早期に抜糸して出来る丈退院可能な患者は退院させ一週間後には手術不能の癌患者数名のみを残し病室は急にがらんとしてしまつた。

八月九日原爆の日、朝より真夏の太陽がぎら／＼輝き雲一つ無い。一同防空服に身を固めて各自の部署に就く、一旦出された警戒警報が解除になつたので皆教室に帰り、鉄兜、防空頭巾を解き一息して又、講義、外来、病棟等に分れてその日の日課が始つた。

丁度其日は私が新患診察の方の受持ちだったので教室の王、青木両君と一緒に表玄関二階の新患診察室に赴き医専の学生の「ポリクリ」、内藤教授は林、草場両君と共に病棟一階の廊下で焼残つた図書、文献の整理、田中、沖洲の両君は二階の入院患者の治療など、三方に分れて各々仕事に就く。

十一時を少し廻つた頃、丁度患者の診察を終えて大きなテーブルを挟んで学生と向合い話して居た。林、草場の両君は隣の予診室の図書棚を片付けて居る。突然「びかつ」と光つたと思つたら物凄い爆発音と一緒に突風が襲いかゝつた。その後どの位の時間が経過したか皆目分ら

ない。目を開けて見たが全然何も見えない。真暗な世界に落込んだ様な気がする。意識だけは鮮明なのが、大型爆弾が本館に命中し、建物全体が地下にめり込んでしまったのではないかと想像してみたが、こうなつたら諦める他ないと観念した。

今迄一緒に話して居た学生達は如何なつたかと心配になり出し、又目を開けて学生の名前を順に呼ぶ。すると傍から返事がする。次第に周囲が明るくなるにつれて自分達の上に積み重つて居る椅子、机、戸棚、診察台、鉄の窓枠、硝子等あらゆる物の破片の中からやつと血だらけになつて起上つた。そして互に無事だつたことを知り手を握り合いつゝ窓枠の吹飛んだコンクリートだけの窓から浦上の町を眺めた時は唯々呆然自失、一同声も出ない。其処にあるものは今迄自分達が任んで居た浦上の町では無く死の街である。濛々たる土煙の中に静まり返つて居るだけだ。その中にあちこちから赤い火の手が昇り始め次第に焰が拡がつてゆく、漸く気を取戻して一同診察室に集つて見れば、診察衣、シャツはちぎれ、ズボンはボロ／＼になり、頭、顔、背中、手、足と言わず殆んど全身皆血塗れになつて居る。「大丈夫か」「大丈夫か」と言い乍ら次々と見るに幸い全員無事、隣りの部屋に居た両君の顔も見える。看護婦の顔も見える。

そうこうして居るうちにも火の手は次第に拡がつて行く、傷の処置を施す暇もなく一先づ病院裏の穴弘法の山へ避難することに決め外へ出る。

丁度其時隣のレントゲン室より永井先生が傷だらけの顔をおさえ乍ら血塗れの看護婦二、三人と共によろ／＼と出て来られた。

「先生大丈夫ですか」と言えば「大丈夫だ早く山へ逃げる」と言われる。階下に降りて表玄関に出て見れば今迄救護班としてテントを張り待機して居た筈の学生、看護婦達の姿もなく、爆風に依つて吹上げられた樹木、テント、瓦、屋根、電柱、木材等凡ての物が雑然と散つている中に黒い裸体が点々と横たわつているのみであつた。病院下よりあの国友先生宅へ上る坂の方角を見れば唯一軒の家も無く、灰色の丘がその傾斜面の赤土を露出しているだけだ。

内科病棟の裏へ廻り毎晩悩まされた犬小屋の在つた辺りと思われる処へ来ると外科、内科、耳鼻科各病棟の裏口より血塗れになつた医局員、学生、看護婦達がよろ／＼と出て来る。どの顔を見ても誰であるか殆んど分らない、三々五々肩を組み、或はあたりに散つて居る棒切れを杖にして裏の山へ山へと避難する。

産婦人科病棟の裏口に来て一步内へ入ろうとすれば中学生と思われる十五、六才の男の子の屍体が横たわり、内から煙が吹出して来て入ることも出来ず、止む無く北講堂の下へ廻り大声で二階の看護室に向つて呼んでみたが、寂として誰一人返事する者としてなく濛々とした黒煙が無気味な音をたて乍ら窓から噴出している。非常口より内に入ると廊下は山と積れた雑片で足の踏み場もない位だ。レントゲン室、旧患診察室、熱気室、実験室、医局と廻つてみたが誰一人見当たらない、二階へ昇ろうと思つたが已に焰の海、どうする術もなく、又引返し病院裏口へ行く。途中小児科の傍で大きな荷馬車が馬諸共倒れて道を塞いで居る。馬の腹を踏んで行けば、屍体累々と横たわる諸鼻、眼に入る血を手で払いつゝ一歩／＼丘へ登る。五十米位登つた所で誰か倒れて呻いて居る、抱起して

みれば教室の王君だ。驚いて「しつかりしろ、」と言い乍ら見れば、右胸部の傷からの出血を手でおさへ乍ら「もう駄目だ」と力無く答える。無理矢理体を肩にかけ、ポロ／＼になつたワイシャツの一片をちぎつて傷に当て又登り始める。「病室の者は」と聞くが全然分らぬと言う。

山の岩穴に着いた頃には既に顔面土色になつて居たが、続々と避難して来た病院の人々の顔を見てから幾分元氣を取戻して来た。四方を見れば、あちらに五人、こちらに六人と山の尾根に沿つてふう／＼言い乍ら皆伏して居る。私は王君を婦人科の看護婦達が一団となつて屯ろして居る傍にあづけて尾根伝いに金比羅山に向つた。幾ら探しても内藤教授の姿は見えない。田中婦長の姿も無い、見当らぬ青木、菊池両君の姿を求めつゝ疲れた足を元来た方へ運ぶ。泣く者、助けを求むる者、水を欲しがる者、呻く者、それは宛ら生地獄の形相である。三菱の工場に狩出された学徒隊の乙女達が黒くちぢれた髪を蓬々とし、半裸の姿で続々登つて来る、見て居る中に何人か途中でばた／＼倒れてゆく。

街を見下せば殆んど火の海、病院の建物も煙の中にかすかに浮いて見える。夕暮れ近くになるにつれ、益々火勢は強まり山の直ぐ下迄迫つて来た。夜に入り左手の銭座小学校の焼落ちる物凄しい音を聞き乍ら、誰も見た者が無いと言う内藤教授の顔を又想い出す。その時角尾学長が中腹の諸島に居られる事を学生が知らせて来たので、若しや学長と一緒に避難しておられるのではなからうかと思ひ、又元氣を出して一人丘を下る。

途中顔面血塗れになられた北村教授が数人の学生、看護婦と共に避難してこられるのに会う、実に痛々しい程の傷だ。更に丘の中腹迄来た

時、前田婦長に附添はれた学長をやつとのことで探し出した。相当の傷である。「先生、大丈夫ですか？」と言えばそれ迄伏しておられた顔を少し上げ「あゝ本多君か、内藤教授は？」ときかれる。やはり駄目だつたのかと思うと全身から急に力が抜けて了つた。其処で学長より古屋野教授、調教授、長谷川教授等の助かつておられること、基礎教室の全滅せることを知つた。

斯くして、大学は八月九日教授以下医員、学生、看護婦の大部分を一瞬にして失ひ、全機能を全く消失して終つたのである。其夜一晩中、燃え続ける大学を眺て居る時、病棟に居た筈の内藤教授以下青木、菊池の両君並に数多くの看護婦諸嬢が、あの大学とその運命を共にして居るのではなからうかと言う不吉な予感がして、まんじりともせず一夜を明した。

翌十日早晝より始つた永井先生の指揮する救護班に元氣な者だけ加わる。其の数、総員僅か四十名足らず、産婦人科教室に生存せる者、林忠実、草場正蔵、田中益雄、沖洲吉博、王文其、と私。此の中、田中、草場、沖洲の諸君は負傷甚しく動けず、生き残つた看護婦僅かに十数名のみ。私は二木君と、元氣を取戻した王君と共に、行方不明の内藤教授、菊池、青木両君、田中婦長以下二十数名の看護婦を探す為山を下りて行つた。

途中、焼付く様な瓦礫の中を浦上へと尋ねて来られた内藤教授夫人に出会う。無言で立ちつくした私達に「内藤は？」と尋ねられる。一同返す言葉もなく唯頭を下げるだけ、漸く私は「何処か逃げて行つておられるとよいのですが、焼跡の方は私達が探します」とやつとの思いで言つ

た。

夫人は丘へ登つて行かれる。その後姿を眺めつゝ何処かで助かつて居て下さればと淡い望みを託す。それから数日は朝から晩迄屍体探しと火葬の連続である。夫人も毎日朝早くより浦上来られ丘と言う丘、川と言う川、島と言う島、くまなく探し廻り、町の焼残つた小学校に急設された救護所も、一ヶ所一ヶ所巡り、万一の希望をいだいて居たのであるが、如何しても発見出来ず、貴重な一日一日が過ぎて行つた。

そのうち菊池君を医局、青木君を一階廊下、田中婦長を一階エレベーター横、病棟主任園田看護婦を三階看護婦室に発見。今は亡き人々を焼く煙が今日も又一日中、かすかに立上つている。夜、外科手術室の裏の土手に作られた防空壕に避難して居られる角尾学長を訪ねる。入るとベツトの上に頸、頬を白く繻帯で巻かれた学長がこちらを向かれる。傍のベツトには外科の石崎助教授が苦しそうに呻いて居られる。

学長は小さな声で「内藤君は未だ分らないかね」と聞かれる。「はい」と答えて立つて居る時、入口から学生が来て内藤教授と思われる屍体が病棟一階の熱気室にあることを知らせて呉れた。急いで蠟燭を片手に、その学生と一緒に熱気室に行く。八月一日の爆撃でやられた図書の焼残りを、一時熱気室に運んで整理して置いた事は知つて居るので何回もその部屋は見たのだがと思いつゝ中に入る。

火災を免がれた部屋の中は紙片と机、椅子、壁土等で足の踏み場もない。学生が探して引出して呉れた屍体とその図書文献の上に横たわつて居るでわなないか。一目見てそれが恩師内藤教授であることを知つた私は其処にふら／＼と跪いてしまつた。

再び学長のもとへ確認の報告に行くと、無言の裡に枕辺に置いてあつたリングを二つ私に手渡され「内藤君に」と唯一言申された。私は頭を下げた。そしてそのリングを落すまいと、両手に一つづゝ確かり握りしめ、溢れ落ちる涙を払う気力もなく、病棟にねむつて居られる内藤先生の許へ引返した。

十年前のあの日も今日の様な蒸暑い夏空だつた事を想出し、又御見舞に頂かれたのであろう貴重な果物を故内藤教授の靈前に供えられたあの角尾学長も今は亡く、炎天下に若き生命を散らせし数多くの学生、看護婦諸嬢の御冥福を祈るのみ。

昭、三〇、七、一四